

令和 4 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390100055		
法人名	流通商事株式会社		
事業所名	グループホーム ゆうゆう黒川		
所在地	盛岡市黒川7地割37番地8		
自己評価作成日	令和4年11月22日	評価結果市町村受理日	令和5年3月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者さんの尊厳を守り、思いを大切にし、安心な暮らしができるように努めています。
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所の理念に「利用者の尊厳を大切にすること」「利用者の人権を守ること」があり、利用者本位の生活を大切に、あくまで利用者が主体であって、利用者に決定権があることを踏まえ、利用者ができることは利用者自身で行うこととし、職員はあくまで提案や助言をすることに徹底している。これは食事に如実に表れており、決められた献立表はなく、食材の買い出しから調理まで利用者が主体となって行っており、職員は傍らで見守りながら必要な場合だけ手伝っている。また、令和4年度には「自分を省みる。常に平常心で明るい環境を作る」というスローガンを策定し、充実したサービス提供のための風通しのよい職場環境づくりに努めている。さらに、令和4年度、空室を利用して短期入居を行なうことができる手続きをとったことから、空室があるときにはグループホームに短期入居をしてみても、利用者が満足した場合に「本格入居」を決断することも可能である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和4年12月6日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営				
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念・方針→基礎研修→取り組み→振り返り評価→課題→取り組みをする中で実際の支援が理念に精通するようにしている途中。	「人権」「安心な暮らし」などをキーワードにした事業所の理念に加え、今年度は職員で話し合って「自分を省みる。常に平常心で明るい環境を作る」というスローガンを策定した。これらを毎月の職員会議で確認しているほか、職員が集う事務室にも掲げて理念の徹底を図り、日々のサービスの中での実践につなげている。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	公民館の鍵がホームにあり地域の人を使いやすいようになっている。近所の無人販売で買い物、野菜や果物のおすそわけを頂いたりしている。お隣さんとは普通のお隣さんといった感じになっている。店へも普通に出かけている。	事業所のすぐそばにある町内会の公民館の鍵を預っており、地域の人たちが公民館を利用する際に貸し出している。町内会が年2回実施している清掃行事に職員が参加しているほか、近隣の馴染みのリンゴ園からリンゴなどを購入している。また、隣家の人が収穫した野菜を持って来てくれるなど、地域との交流がある。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所の力を活かした貢献はできていない。	
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	サービス向上に活かしていない。入居状況、事故報告、運営状況等の報告を行っており会議録を回覧しているが、管理者は運営推進会議にてサービスの実態を伝え意見を求めるべきであり、内部に対しても地域からの意見を積極的に伝える必要がある。	コロナ禍でこれまで書面開催だったが、10月からは参集して開催している。会議では利用状況、事故等の状況、運営の状況などについて報告している。書面開催の際にも意見が出やすいように返信用封筒を同封しており、会議メンバーからは利用者の生活の様子について質問や意見をいただいている。今後はケアの具体的事例などを紹介して、サービス向上につながる一歩踏み込んだ意見をいただくことも期待したいと考えている。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	必要に応じて連絡している。今年度は短期利用の認可を受ける為の作成書類等の相談をしている。	地域包括支援センターの職員が運営推進会議のメンバーになっていて、情報交換が密に行われている。市の担当課からはコロナ関連の情報をメールでもらっているほか、今年の6月から空室利用型の短期入居の指定を受ける際の手続きについて丁寧に助言を受けるなど、協力関係が築かれている。

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	10月、行動制限として掃き出し窓の施錠を確認している。(わかりにくいところにある開閉ロック)身体拘束廃止適正化委員会にて話し合い今後は行わないように指導している。	身体拘束適正化に関する指針を策定しており、管理者を含む3人の委員で構成する身体拘束廃止適正化委員会を年4回開催して話し合いを行っているほか、年2回職員研修会を実施している。委員会での話し合いで、掃き出し窓の施錠を見直した。玄関の施錠は日中はしておらず、外出しそうな利用者があるときは、一緒についていたり、さりげなく声をかけたりして、拘束しないようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	学ぶ機会が不足しており再確認が必要である。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	尊厳を大切にしようという理念の基、サービスにおいて権利を擁護することにつなげているが、制度の活用については管理者が必要に応じ関係機関等と相談している。職員が実例を交えて学ぶ機会が必要である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の時はできるだけわかりやすく説明している。変更になった重要事項についても説明し理解を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	来て頂いた時にアンケートをお願いしているが、面会の機会が非常に少ないことも重なり意見はほとんど寄せられていない。意見があった場合、地域運営推進会議や職員会議に出すこととしている。	利用者からは日常生活の中で意見や要望を聞いており、例えば椅子や座布団の所望などがあれば、その都度迅速に対処している。家族等が事業所に面会に来訪したときに記載してもらっている「訪問記入帳」に意見欄を設けているが、意見などが出されることはないのが実情である。	家族等から意見や要望がほとんど寄せられないのは、成年後見制度を利用している利用者が多いことも一因と考えられますが、利用者の様子や職員の異動などについての情報が一部の家族に伝わっていない可能性があります。運営について家族等とコミュニケーションギャップが生じないように、定期的な「事業所だより(利用者の様子)」などのお知らせを検討してみるとともに、運営推進会議に家族等の参加を促すことなども検討されることを期待します。

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議で意見や提案できる場を設けている。今年度は代表者と職員1名の面談を実施している。	毎月開催している職員会議では、職員から意見や提案を聞く機会を設けている。会議の開催に当たっては、事前にテーマに対する職員の意見等を提出してもらい、取りまとめた資料をもとに話し合いを行なっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は定期的に訪問し勤務状況を把握している。その際、管理者・リーダー・職員と意見交換をし職場環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者が一人ひとりの能力を大まかに把握している。管理者・リーダーはサービスの質を向上させるため内外の研修を受ける機会の確保をしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	新型コロナ対策で交流で積極的にできていないが、管理者は包括支援センター主催の勉強会や介護支援専門員の研修に参加しサービスの質を向上させていけるように努めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人の思い、やりたいことなどを主に、その人が望む暮らし、必要と思っていることをまとめながら安心して過ごすことができるように努めている。利用開始前に自宅へ数回会いに行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	希望や要望をお伺いして関係を作るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	希望や思い大切にしながら、それまでの暮らしやお身体の状態に応じて支援している。		

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は利用者さんの暮らしを支援する役割が主となり、暮らしを共にする者同士ではないため。利用者さん主体とする支援者としての関係を築く取り組みをしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と十分に話す機会もてておらず、意向の確認ができていない。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	機会は多くはないが、感染予防しながら馴染みの場所へ出かけられるような個人の計画も作り支援している。	介護計画の中に馴染みの場所を記載し、職員間で共有して馴染みの場所に出かけることを支援しており、車に利用者に乗せて以前住んでいた地域のスーパーマーケット、八百屋や理・美容院を訪れている。家族等との面会は、コロナ禍により玄関先で行なっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者さん同士で相談して料理できるようにしている。孤立する方は職員が関わりをしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後の関係性は保てていない。		

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の思いを大切にしたい計画が中心になっている。意向の把握が難しいときは、ご本人本意に考え不利益がないように努めている。	介護計画の中に本人の思いや暮らし方の希望を記載し、職員間で共有している。日々の暮らしの中で新たに本人の思いなどを把握したときは、記録を付け加えている。意思疎通が困難な人には、家族から聞き取ったり、これか、あれかというような選択肢のある質問に置き換えて、思いを把握するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	してきたこと、したいこと、いきたい場所、会いたい人を含め、どんな暮らしをしてきたかをできるだけ知り共有し支援できるようにしているが情報把握が不十分な方も多い。		

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	お一人おひとりの自由を乱さないようにしながら、思いやお身体、どのように過ごしたいか？過ごしたか？をわかるように記録し共有するように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	全職員から利用者さんの現状を記録に書き出し、ご本人さんの思いをできるだけ確認しながら計画を作っている。計画の振り返りも全員で行っていて次につなげている。	利用者の状況で気づいたことを職員全員が記録し、それを回覧して職員間で確認を行ない、記録内容を踏まえてケアマネージャーが介護計画を作成している。3か月ごとに職員全員で振り返り、原則として半年ごとに見直しを行なっている。協力機関の訪問看護ステーションから週1回看護師が来所しており、その医療情報も介護計画に反映させている。前回の自己評価に基づき目標達成計画を作成し、ニーズを反映して現状に即した実践可能な計画を作成することとして取り組み、計画作成担当者を2名にしたが、本人・家族と十分に話し合いをすることや、それが実践可能か職員から意見を聞いて調整することについては、まだ取組みの過程にある。	介護計画を作成するに当たって、本人や家族と話し合ったり、現状に即した内容にすることは大切なことであり、この目標達成に向けて引き続き取り組んでいかれることを期待します。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々、利用者さん個人の記録と日誌で共有しながら、計画の振り返りやアセスメント(現状の把握や課題分析)のときにも気づきや工夫など共有できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	この1年、特別なことはないが、必要があればできる限り柔軟に支援をする方向である。□ □		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	豊かな暮らしを送るための前提に、その人の普通の暮らしとして、関わってきた場所や人も大切にしながらの支援を基本としている。		

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	通院は希望する病院を優先しているが、病状などにより別をお勧めする場合も1例あり。	利用者9人中8人は従前からのかかりつけ医を受診しており、1人については病状により協力医療機関に通院を勧めている。それぞれ通院する際は職員が同行している。受診結果については「健康の記録」により情報を共有している。また、週1回訪問看護を受けており、適切な医療を受けられるように支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の看護師の訪問と何かあった場合に365日24時間の連絡体制で助言など受け支援している。健康の記録という用紙を使って多職種のことが共有しやすいようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院先での聞き取りホームからの入院時連絡票を使いながら共有し療養に活かしている。今後の望める状態を確認し合いながら退院のラインを設定したり、歩いたりできるようリハビリも入院中に行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	意思確認が可能な方には重度化や終末期に向けた方針を確認しているが、家族・後見人とは共有していない為、今後行う予定である。	重度化や終末期の対応についての決まった方針はなく、基本的には個々の利用者の状況や希望に応じて対処方法をその都度判断している。重度化や終末期に向けた話し合いは、利用者本人と行なうことはあるが、家族等とは行っていない。看取りの事例は過去にあったが、最近では職員の入れ替わりもあり経験者は少ない。	重度化が予想される利用者については、いざというときに家族もあわせてに対応できるよう、早めに家族と話し合いをしておくことが望まれます。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的な訓練はできていない。マニュアルがあり、変わったことがあれば管理者に連絡をすることになっている。		

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	夜間想定訓練を定期的に行っている。避難には多くの課題が残る。水害に関しては地域性として避難しない方向である。	前回の外部評価を踏まえて、日中に火災の夜間想定訓練を今年は4回行なった。避難予定先の1番目は事業所の駐車場、2番目は地区の公民館としている。緊急時には警察・消防に自動連絡することになっているが、5分以内に来られる職員1名を除いて、職員が駆けつけるまで時間を要する可能性がある。水害に関してはハザードマップ上は洪水浸水区域に入っていない。災害に備えて、水や食料等を3日分準備している。	職員が駆けつけるまでの間、利用者を避難予定先に円滑に誘導したり、見守ってもらえるよう、あらかじめ近隣の方々と話し合い、一緒に避難訓練を行なうなど、協力体制を築いておくことを期待します。

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	理念を基に人格を尊重し言葉遣いも気を付けている。プライバシーに配慮も、間取り上、会話が聞こえてしまい、意識が低くなっている時もある。物忘れへや失敗へ配慮し自尊心を損ねないようにしている。	事業所の理念を実践し、利用者の誇りやプライバシーを損ねない丁寧な言葉かけや対応を行っている。人格を尊重し、いろいろな失敗にもさりげなく対処しており、入浴や食事などの記憶がない場合でも、それをたどることはしないようにしている。民家を改造した建物の間取り上、職員の会話が利用者に聞こえてしまうことがあるので、無用な誤解を生まないように気を付けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定を大切にしている。指示するような形ではなく、できるだけわかりやすく説明し本人が決められるように支援している。職員主体の言葉か利用者さん主体の言葉か？も考えながら支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者さんをコントロールすることのデメリットや、やりがいにつながらないことを理解しながら、その人のペースや自由に過ごすことができるように支援している。職員によっての能力の差もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪をきりたい、髪を染めたいなど希望に沿っている。		

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立はない。普段の買い物で食べたい物を買いたい、作る時に何を作って食べるか決められるようにしている。「職員と一緒に」が前提ではなく、職員がいなくてもできることをやれるような支援を心掛けているが昼と夜は職員が働きかけをすることが多く今後の課題である。	利用者本位という理念の下、食事を作ることは生活リハビリになることもあり、あらかじめ決まった献立はなく、利用者が職員と一緒に買い物に行き、利用者が食べたいメニューを決め、自分達で作って食べることができるようにしている。職員は、弁当などを持ってきて、利用者と一緒に食事をとっていない。職員は調理を手伝うことはあるが、後片付けも利用者がしている。朝食は利用者が自発的に作っているが、昼と夜の食事では職員が声かけをすることが多くなってきている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	普通の暮らしの支援を中心としているので栄養や飲み物の量はこだわってはいない。栄養不足、脱水、便秘にならない程度の感覚である。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分でできない方、したくない方への働きかけを殆ど行っていない。できている方でも定期健診は必要であるので今後の課題である。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	過剰なオムツにならないように夜と昼間の使う種類を変えたりしている。その方のおトイレの時間で行くことができるようお手伝いしている。	それぞれの排泄パターンに応じて誘導し、トイレで排泄できるよう支援するとともに、過剰なオムツにならないように夜と昼のオムツの種類に配慮している。利用者9人中、自立している人は6人となっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	体の動き、お腹の動きを少しでも多くする支援をしている。どうしても難しい場合はお薬の力を借りている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	大まかに午後の時間であるが、ご本人が入るかどうかが何時に入るかを決めている。楽しく入っていない方に楽しく入ることができる支援はなかなか難しいものがあるが努めている。	原則として3日に1回、午後入浴としているが、希望すればこの回数や時間帯でなくても入浴することができ、また、一人で入れる利用者は夜でも入浴できるようになっている。一人で入浴できる利用者は4人おり、他の5人は、背中流し、足洗い、洗髪などを職員に支援してもらって、入浴を楽しんでいる。	

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	時間は決めず本人の休みたい時に休んでいるが、夜にあまり眠らず、昼に眠そうにしている方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全てを理解することは難しいが、分からない時は、すぐに確認できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	役割を作ることが前提だと押し付けになり得るので、思いやりやりたいことなど知りながら、普通の何気ない話しなども大切にしている。普通の暮らしの中で家事をしたり、張り合いができたり笑ったりが大切なことだと考えている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染症対策の為制限はあったが、普段通り、スーパーや行きたい場所に出かけている。	コロナ禍で外出を控えていたが、現在は、近所のスーパーマーケット、個人商店、馴染みの八百屋、理・美容室に出かけられるようになっている。また、紫波町のアジサイロードや盛岡市の御所湖にドライブに出かけている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	契約時にお金を持つ大切さを説明している。持たたい人はできるだけ持つ、持っても無くしてしまう方もいるのである程度の取り決めの中で、どうするか相談して決めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話できるようにしている。		

事業所名 : グループホーム ゆうゆう黒川

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	限りなく普通の家で普通の暮らしができる間取りやしつらえになっている。狭いからこそ利用者さん同士でのトラブルで心地よく過ごせない現状もあり工夫に苦慮している。	事業所は民家を改造した建物なので、利用者の家と同じような感覚で暮らしやすい間取りとなっている。トイレも清潔を保ち、玄関、廊下、居間、食堂なども明るく居心地よく過ごせるように工夫されている。物理的な狭さから利用者同士のトラブルに悩まされることはあるが、認知症特有の症状に起因することを理解したうえで対処するよう努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	間取りが狭いため、気の合った人同士だけで過ごせる居間や台所の工夫に苦慮しているが、部屋を中心に過ごしたり、ある程度のバランスが取れている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	できるだけ馴染みのもの、大切なものを持ち込むことをお勧めしている。	各部屋にエアコン、床暖房、ベッド、タンスが備え付けられている。利用者は自分の布団、茶碗、テレビ、裁縫道具、家族写真など馴染みのものを持ち込んでいる。利用者の中には仕事をしていたときに使用した道具を持ち込んでいる人もいて、本人が居心地よく生活できるように配慮されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物の中は、わかりやすい、覚えやすい間取りになっている。できるだけ近代的な馴染みのないものはおかないようにしている。手すりも必要な方が歩きやすいようにしている。		